

平成19年春夏号

四寺廻廊

〈四寺法要〉

東北歴史博物館特別展

「慈覚大師円仁とその名宝展」開幕式典

平成十九年六月十六日、東北歴史博物館特別展の開幕を記念し同会場で四寺法要がいとなまれました。

御詠歌の詠唱に導かれて、滋賀県金剛輪寺蔵の慈覚大師像前に設えられた道場まで練行。

中尊寺の山田俊和貫首が導師をお勤めになり、四寺の住職・僧侶が唱える声明に、信者・来賓そして同企画展を訪れたお客様が聞き入りました。

四寺の開基である慈覚大師ご縁の仏像・宝物が、東北歴史博物館の特別展として公開されることは、四寺廻廊にとっても有難く深いご縁を感じさせるものです。法要後、参列した信者の方々は、それぞれに慈覚大師ゆかりの名宝を熱心に拝観していました。

四寺廻廊は平成十五年の発足から五年目に入りました。四寺それぞれの特色をいかけた活動を進めてきました。また、明年にはJRの「仙台・宮城デステーション」キャンペーンの柱の一つとして位置づけられるなど、広く知られるようになりました。今回の「慈覚大師円仁とその名宝展」を機に、多くの方々が慈覚大師円仁さんの足跡に触れ、また四寺廻廊に親しみを持っていただけるものと期待しています。



《もくじ》

- 四寺ご住職のお話……………
- 四寺徒然「旅は、欲張らない方がいい。」
- 句「冷たい麺」……………
- 山川草木(中尊寺ハス)……………
- 山形花笠まつり……………
- お知らせ……………

【宮城県東北歴史博物館】

慈覚大師円仁と

その名宝展のご案内

平成十八年は天台宗開宗千二百年目にあたり、平成二十年には円仁が十五歳で下野(栃木県)の地から比叡山を目指して千二百年目にあたります。この機縁を迎え、生まれ故郷の下野・円仁が活躍した滋賀そして、いまだ円仁への信仰の厚い東北この三ヶ所において、円仁を包括的に紹介する初めての展示会です。国宝・重要文化財の展示物を一堂に見ることが出来る数少ない期間です。どうぞ足をお運び下さい。

期間

平成十九年六月十六日(土)～七月二十九日(日)

入場料

- 一般・大学生 二〇〇円
- 高校生 八〇〇円
- 小・中学生 五〇〇円

(いずれも団体割引あり)

場所・お問い合わせ

- 宮城県多賀城市高崎 一 二二一
- 東北歴史博物館

☎〇三三 三六八 〇一〇一

四寺に任職のお話

「平常心是道」



瑞巖寺 住職
吉田道彦

現代日本はまさに、明治近代化の社会構造が音をたてて崩れ落ちようと、のた打ち廻っているように見えます。我われは、自らが造った社会に反抗し、常識というものが、いつの間になくなるうとしています。現代は日本古来の、日本人、文化、伝統までもが消滅しようとしています。

では本来、私達が持っていた日本人らしさ、人間らしさとは何でしょうか。それは思いやり

を持った尊厳に満ちた「こころ」ではないでしょうか。それでは、そのこころを取り戻すにはどうしたらいいのでしょうか。

江戸時代後期の儒学者、海保青陵（一七五五～一八一七）は『前識談』の中で、「先を見通さんとすれば、まず我を観るべし」と語っています。

これは三つの段階をもって、自分自身をいかに高めていくかを教えております。まず第一に、「我観我（われわれをみる）」で自分自身をきちんと観るように訓練せよと語っております。他人の事は何でも見えている人でも、いざ自分自身のことになると、まるで駄目になる。そうではなく、きちんと自分を観る眼を持ちなさいと言っています。

第二に、「我為物（われものとなす）」で、自身を他の物、他の人間、他の性別に置き換えて考えてみなさいと言っています。いうならば、自分を他人や他の物から見たら、客観的にどう観えているかを、きちんとみえるように、訓練しなさいと言っています。

第三に、「皆利我（みなわれをりす）」です。これは、何が自分にとって大切なのか、大事なかが理解できるように、訓練しなさいという事です。

この事を踏まえて最も言いたい事は、まず、自分自身をよく観て、常に他人の立場にたつて

物事を考えられる、人に思いやりの出来る人間であれという事なのです。

禅宗の有名なお話に、中国の趙州和尚と修行者のお話があります。

修行者「私は修行者です、一つご教示をお願いします」

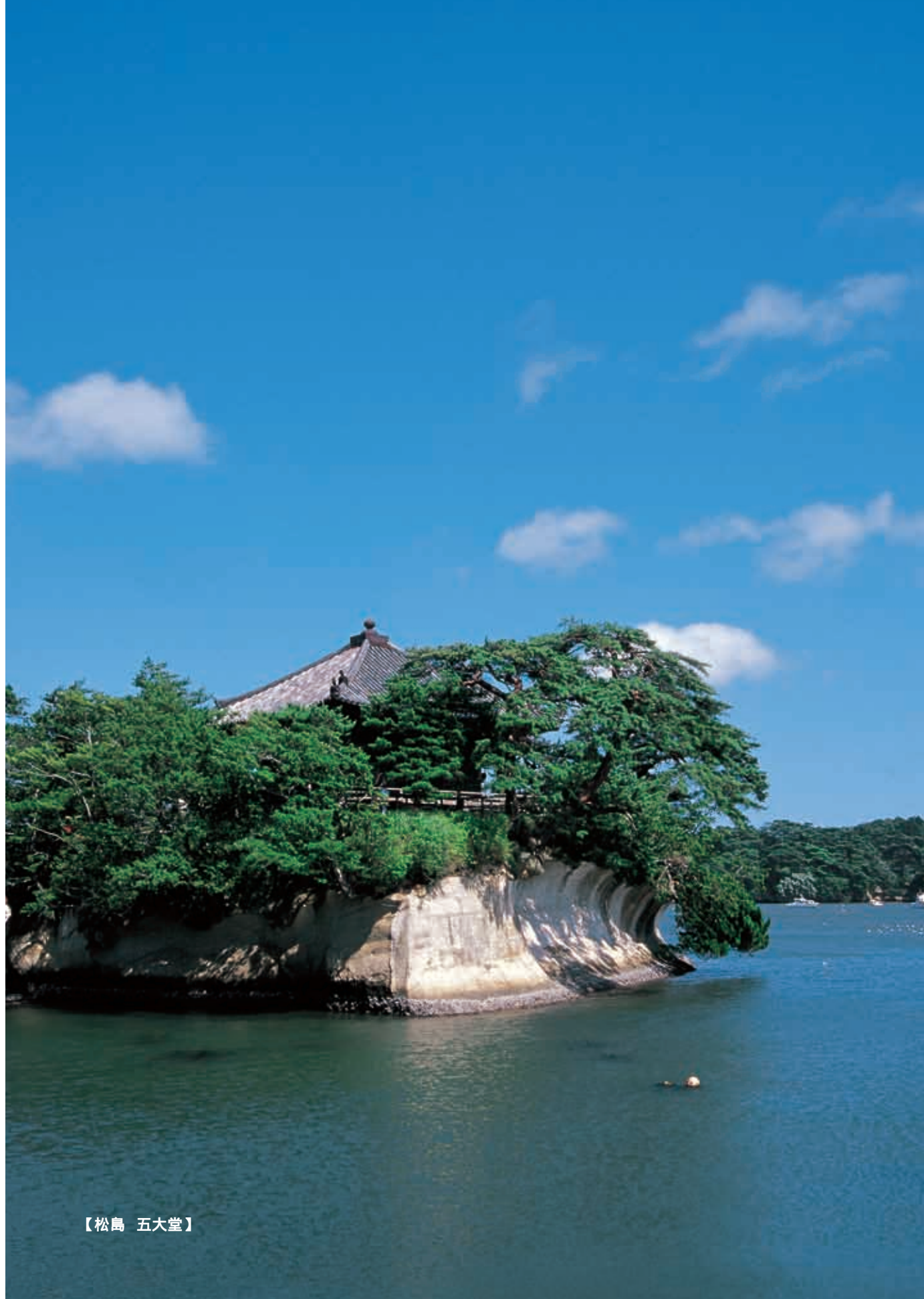
趙州和尚「朝のお粥は食べたか」

修行者「はい、いただきます」

趙州和尚「そうか、それなら使ったお椀を洗っておきなさい」

使ったお椀を洗うという、日々、日常に起こっていることを、日常的にきちんと出来る。なんの難しい事でも、難しい学問でもありません。これが禅であり佛のこころです。入り口の戸を開けたら、きちんと閉める。靴を脱いたら、きちんと並べて揃えておく。部屋が汚れたら、きちんと掃除する。人としてあたり前の事を、あたり前にする。これが、現代人には欠けているのではないのでしょうか。一人ひとりの人間が、きちんと自分を見る目を養い、また他人を思いやる、そんな、こころを持ち合わせたなら、穏やかな希望に満ちた、輝かしい未来が広がるのではないのでしょうか。

そして、たまにはぎすぎすした日常の喧騒を離れて、みちのく四寺廻廊の旅に出掛けられてはいかがでしょうか。また新たな自分を見つける旅が始まるに違いありません。



【松島 五大堂】

旅は、欲張らない方がいい。

然 徒 寺 四



最近の国内旅行は、二泊三日が主流だそうです。しかも旅行期間は年々短くなってきていて、一泊二日も増えているようです。時間もお金もないということでしょうか。でも不思議なことに時間が少なくなった割に中身はそれ程減ってないようです。つまり何とかやり繰りした日々を一杯楽しもうと、盛り沢山のメニューを用意しているのです。あの寺や神社に参拝し、あそここの博物館と美術館を見て、お昼はこの郷土料理を食べて、お土産はここ、宿はあの温泉などなど朝から晩までスケジュールが決まっています。それを一つ一つこなすためには、効率良く旅行することが求められます。それは別の見方をすると余裕のない、遊びのない旅行です。団体旅行は勿論ですが、個人でも事前にインターネットで調べたりしてきっちり日程を決める傾向があるようです。

でもそんなに駆け足で旅行をしても、楽しくも面白くもないと思うのですが……。思い切った旅に出たのに、ただ忙しかけずり回っていたのではいつもの生活と変わりありません。もしかするととってもいい出会いがあったはずなのに、気づかずに通り過ぎてし

まっていたかもしれません。その土地の良さにふれるには、少しその場にとどまってみないと分らないことがよくあります。決まり切った旅では味わえないような思いがけない体験も、旅の大きな喜びの一つです。いっぱい見てやろう、食べてやろうの旅もあっていいでしょう。でもじっくりと心を潤す旅も必要です、心にも栄養補給をはいかがですか。

潤いは、ゆったりした時間から生まれます。たまには寺をお訪ねください、仏様が待っています。仏様は一人一人に語りかけてくださいます。仏様と一対一で向き合ってみてはどうですか、どんな会話で出来るかはあなた次第です。会話が途切れたら、回廊に佇みほんやりするのでもいいでしょう。庭に出て風に吹かれるのでもいいでしょう。

また何かに疲れたとき、たった一枚の絵を見に遠く足を運んだっていいじゃないですか。あれもこれもと動き回るより、心が落ち着きます。

旅はどこか偶然に支配されていて、時に驚くような発見や出会いがあります。でもそれは駆け足ではなかなか気づかないことなのです。車窓から道端に咲いている花に気づくことは容易ではありませんが、歩けばそれ以上の情景を目にすることが出来ます。どうやら人間の動体視力には限界があるようです。もっとゆっくりと欲張らずに旅をしたいと思うのです。そうすればもしかすると、旅の途中で西行や芭蕉のように歌や俳句が浮かんでくるかもしれません。

旅は、欲張らない方がいい。



旬

冷たい麺

冷たい蕎麦が美味しい季節となりました。

東北は気候的に蕎麦の栽培に適した場所が多く、特に山形県は「板そば」「紅花そば」を筆頭に地域の特徴を生かした様々な蕎麦があり、どこで食べても当たり外れの無いのが嬉しい。

冷し中華なら、発祥の地と言われる仙台で食べてみたいものです。近年は細く裂いた蒸し鶏、キウウリにコマだれをかけたバンバンジー風の冷し中華が流行っているようです。

ラーメンの本場中国では、いわゆる日本の冷たい麺はほとんどお目にかかれないうらい。

と云うことで、今回は岩手県を代表する盛岡冷麺のお話です。

「冷麺なんて全国どここの焼肉屋にもある」と言われそうですが、岩手の冷麺は片栗粉と小麦粉を使用し、独特のコシの強さ、弾力性、喉越しのよさに特徴があります。

発祥のルーツをたどると、冷麺の本場である朝鮮半島北部の咸興出身の青木輝人さんという方が、昭和二十九年に盛岡市で「食道園」を開業し、平壤冷麺として供したのがはじまりとされています。その後、昭和六十二年ころから全国的に知られるようになり、今では盛岡冷麺と言ったら冷麺の代名詞になりました。

麺の上のせる具は、お店により異なりますが、チャーシュー、キムチ、きゅうり、ゆで卵、スイカもしくは梨といったところが一般的です。岩手県内、ラーメンをお出する店ならメニューに紹介されていますので、ぜひお試しください。



中尊寺ハス

金色堂で藤原泰衡公とともに八百年眠っていた蓮の種。その種が初めて花を咲かせたのは平成十年の七月のことです。昭和二十五年に、奥州藤原氏四代の御遺体が調査されました。その時見つかったこの種は、栽培を試みられることもなく、さらに四十年あまりを研究室の片隅で忘れ去られようとしていました。

中尊寺は故大賀博士の門下である恵泉女学園短大の長島時子教授に栽培を依頼。先生のご尽力によって平成五年に発芽に成功しました。しかし、花を咲かせるまでにはさらに五年の歳月を要したのです。

普通、ハスの花は三日間咲き四日目に散るそうですが、中尊寺ハスは四日目にも花弁が開きました。長い間待ち続けたハスの喜びだと感じた人が多かったようです。八百年とは、人間にとつては本当に長い時間です。この種はずっと待っていてくれました。一所懸命花を咲かせてくれました。

【お問い合わせ】中尊寺事務局

山形花笠まつり

山形県山形市



「ヤッショ、マカシヨ」と威勢のいい掛け声と、勇壮な花笠太鼓の音色。真夏の夜を彩り、華麗に舞う花笠の群れ。東北を代表する夏まつり「山形花笠まつり」は毎年八月五日・六日・七日の三日間、山形市の中心市街地、本町と十日町と七日町で約一万人の踊り手が参加するパレードです。今年で四十五回を数えます。

「花笠踊り」は、山形県の花・紅花をイメージした花を装飾した菅笠「花笠」を持ち、大正時代に灌漑用溜池工事（山形県村山地方）で唄われた「土突き唄」が元唄になり、親しみやすい曲調から民謡としても広く知られている「花笠音頭」に合わせて踊るのが基本。

その種類も、山形花笠まつり（花笠パレード）のために考案された「正調花笠踊り」（薫風最上川）通称女踊り〜と蔵王暁光（さくらんぼ）通称男踊り（さくらんぼ）をはじめ、「花笠踊り」の源流を持つ「笠回し系花笠踊り」、自由な発想で展開される「創作花笠踊り」など変化に富んでいます。

近年は、一般観光客も踊れる「輪踊り」（パレード開始時に市役所前で行われる）、「飛び入りコーナー」（パレード最後尾）が人気になっており、「山形花笠まつり」を見るだけでなく、参加して楽しむお客様が増えています。

【お問い合わせ】山形市観光協会へ 〇三三 六四七 二二六六



大文字まつり

編集後記

夏の浴衣は、着ても見えていても清々しい
ものです。甚平、団扇、金魚すくい、井戸
で冷やした西瓜など、日本人は知恵をこら
して蒸し暑い夏を楽しんできました。クー
ルビズ、エアコン、冷蔵庫などを利用して
いる現代の私達にとって、「懐かしい日本」
として感じられる風情です。

お知らせ

- 6月24日 藩祖政宗公毎歳忌 「瑞巖寺」
- 6月20日～7月10日 あやめまつり 「毛越寺」
- 6月29日 芭蕉祭全国俳句大会 平泉町
- 8月5日～7日 山形花笠まつり 「山形市」
- 8月6日 磐司祭・夜行念仏 「立石寺」
- 8月14日 中尊寺新能 「中尊寺」
- 8月16日 大文字まつり 「平泉町」
- 8月17日 松島灯笼流し花火大会 「松島町」